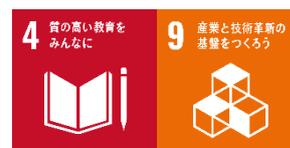


「テクニカルライティング」のスキルアップを!!...∞

理工系編集者 小山 透



「テクニカルライティング」という言葉をご存知でしょうか？ もとは、機器に付属させるマニュアル（取扱説明書）制作のための作文技術を意味していましたが、いまでは、より広義に、“理工系/科学技術系”文章・文書作成のためのライティング技法のことを指します。ここでは、筆者がテクニカルライティングに取り組むことになった顛末とともに、その必要性・重要性をお話したいと思います。

これまで、筆者は共立出版(株) (37年間) と(株)近代科学社 (13年間) で通算 50 年にわたり (半世紀もの長きにわたって飽きもせず) 数学・数理科学・情報科学/工学・認知科学・デザイン科学/工学などの分野を中心に出版活動を行ってきました (関与した出版物は単行本、講座・シリーズ・双書、月刊雑誌例月号・臨時増刊号・別冊、辞典・事典・ハンドブックなどの総計で千点超となりました)。

この世界に入るキッカケは、東京理科大学理工学部数学科在学時代の 1968 年 (2 年生時)、矢野健太郎 編『数学小辞典』に出会い、その発行所である共立出版(株)の存在を意識したことでした。また、それまで既に、数学の著名洋書と絶版和書の、いわゆる “私教版 (海賊版)” 製作を経験していたことから (もう時効ですよ、当時の為替レートは 1 ドルが何と 360 円の固定相場でしたので、輸入物はみな高額で、洋書も同様でしたから、なかなか原書は買えませんでした)、“出版物の制作” に対してこの頃から関心を寄せていたのです。

私の大学卒業時 (1971 年 3 月) は大学紛争最盛期でしたので、ほとんどの大学で卒業式が行われず、また大学院の入試も見送られました。(仕方なく) 1971 年 4 月に共立出版(株)に入社し、出版の世界に入りました。当初は“腰掛け”のつもりが、やってみると実に面白くなり、以後あつという間に 10 年間、主に数学関連書の企画・編集に携わりました。この間の編集経験で、“伝える/伝わる日本語” に対する断片的知識と疑問点 (モヤモヤ) とを、無意識的に蓄積していくこととなったのです。

ちょうどその頃、

『理科系の作文技術』(木下是雄 著、中央公論、1981 年)

という、いまでも読み続けられている、論理的な文章を書くための詳細がまとめられたベストセラー&ロングセラー書が出版されました。この本は、まさに筆者の編集者観を決定づけた本でした：共立出版入社以来 10 年間の編集者生活の中で溜まっていた経験的知識を整理してくれていて、それまでの“モヤモヤ”も晴らしてくれた内容だったのです。

一方、1981 年 4 月、書籍編集部からコンピュータ・サイエンス誌 *bit* (月刊雑誌、創刊 1969 年 3 月号～終刊 2001 年 3 月号；既刊分はイースト社より電子復刊済み) 編集部へ異

動しました（させられました）。そして、その直後に情報処理学会主催の「プログラミング・シンポジウム」（通称「プロシン」）に参加する機会を得て、筆者にとって、その後の編集者人生に新たな方向付けを与えてくれる発表に出会うことができたのです：

その正式な題目は失念しましたが、講演内容の概要は、

「F社コンピュータ・マニュアルの不備とその対処

—マシンはエクセレント、ソフトはベリーグッド、しかしマニュアルはジョーク!!」
といったタイトルで、オーストラリアのユーザから寄せられた、F社の最新鋭コンピュータへの評価を受けて、そのことがきっかけとなり、F社では社内に「マニュアル制作部」が設けられて“テクニカルライティング”に鋭意取り組んでいる—といった内容でした。

それを聴くに及んで、筆者は出版物における日本語の論理性・精確性・判読性に対する問題意識をますます強くすることになりました。

これらの状況の下、必然的に、それまでの数理関係と並行して、“伝える/伝わる日本語”に関連する出版物の作成を出版活動の軸の一つとして加えることとした次第です。

そして、当時 *bit* の編集長をしていた筆者は、一人の「テクニカルライター」と運命的に出会うこととなります（1987年頃）。その人は高橋昭男氏で、じつは、彼は当時、成蹊大学理工学部で非常勤講師として「テクニカルライティング」の講義を担当されていたのです。

高橋氏には、*bit* へのご寄稿と共に、共立出版から

『ザ・テクニカルライティング—ビジネス・技術文書を書くためのツール』（1993）

『技術系の文章作法』（1995）

の2著を上梓していただき、その折々にテクニカルライティングについての様々な知識をお教えいただくことができました。前記した木下先生の『理科系の作文技術』をバックボーンとして、これらの編集・制作に携わったことで、そのための実践的な知識を蓄積することができたわけです。

その後、次第に、知合いの大学・高専・高校教員などから、テクニカルライティングの講義を依頼されるようになりました。大体は1時間半の「特別講義/授業」でしたが、2010年に慶大SFCから、半期の“正規授業”をしてほしいという依頼が届きました。

ちょうど、共立出版から近代科学社へ移籍したばかりの時でしたので、要請を快諾し、3年間務めました。そして、その講義資料を基にまとめたのが

『科学技術系のライティング技法—理系文・実用文・仕事文の書き方・まとめ方』（2011、慶應義塾大学出版会）

です。本書は、その後、母校である東京理科大学での9年間にわたる授業の教科書としても活用しました。

我が国の「国語」教育は感性・情緒性の授受が主体となっていて、「日本語」による情報伝達性・精確性の教育にはあまり力点が置かれていません。筆者も、小学校-中学校-高校と、「国語」は勉強してきましたが、様々な事象・事柄を論理的かつ精確に、また分かりやすく

伝えられるような作文技術を教わることには、とんと無縁でした。

しかしながら、多くの人々は、学生生活ではレポートや論文、また社会に出た途端に会議資料・議事録・報告書・提案書・企画書・契約書などの形として、それぞれの仕事の内容・結果/成果を纏めて頭にした「文書」にしなければならないという現実直面し、「テクニカルライティング」のスキルの必要性をヒシヒシと感ずることになります。

それは、学生も含めて、企業人、研究者、教育者ほか、だれもがそれぞれの社会活動を価値あるものと認めてもらい、かつ円滑に遂行していくために必須の知識・技術であるからなのです。

執筆者のプロフィール

小山 透（こやま・とおる）

1948年11月27日、千葉県柏市生まれ

1971年3月、東京理科大学工学部数学科卒業

2009～2011年、慶應義塾大学 SFC 環境情報学部・非常勤講師

2011～2019年、東京理科大学理学部・非常勤講師

元 *bit* 誌編集長、元 共立出版(株)編集部長、元 (株)近代科学社社長

現在：自遊人